

全歴研第 56 回研究大会(東京大会)

全歴研の大会は、原則として東京・首都圏・地方の順で開催地を持ち回り、毎年 7 月末に開催されている。昨年は、2013 年の神奈川、2014 年の大阪に続き 3 年ぶりに東京での開催となった。今回の会場は東京大学伊藤国際学術研究センターで、参加者は 292 名であった。大会基本テーマは、「国際社会に生きる資質を養う歴史教育を求めて」というもので、神奈川からは栄光学園の福本淳先生が「世界史の中の横浜中華街」と題する報告を、第 4 分科会(「近代世界の特質と社会の変容について考察する」)で行った。神奈川からは、他に筆者を含めて 9 名が参加し、充実した研修の機会を得た。

筆者が参加した分科会は福本先生の発表があった第 4 分科会と第 5 分科会(「主題学習「今日の世界が直面する課題」について歴史的観点から研究する」)である。第 5 分科会、都立浅草高等学校の海上尚美先生は、「ミュージアムを授業に～であう・たのしむ・つながる～」と題し、学校外の施設を活用して生徒の個に応じた学習をいかにサポートするかという問題について、豊富な実践を交えた報告を行った。ここでは、単に「連れて行く」こと以上にミュージアムを歴史教育に活用する様々な手法を学ぶことができた。余談ではあるが、海上先生は昨年 8 月に東洋文庫を会場に「歴史を語る、ミュージアムを語る」という教員向け研修会のファシリテータも務め、神奈川からも世界史研究推進委員長と筆者が参加し、多くのヒントを得たことも記しておく。第 4 分科会、千葉県立船橋古和釜高等学校の黒木俊介先生は、「日露戦争の原因」と題する報告を行った。黒木先生の報告は、小中学校時代にグループ学習などの参加型学習の輪に入りきれなかった生徒たちが多い学校で「いかに生徒を飽きさせずに授業に参加させるか」ということを主眼とした実践報告で、似たような生徒の多い筆者の勤務校でも活用できそうな内容を多く含んでいた。本件からの発表者である福本先生は、同じく第 4 分科会の最後の報告者で、昨年の歴史分科会研究発表会、アジア世界史学会と回を重ねるごとに内容が練れてきた印象を受けた。他県の参加者にとっては、遠足などで訪れる(かも知れない)横浜中華街を世界史学習にも利用できることを示したという点で、大いに参考になったと思われる。

大会 2 日目、午前の第 1 分科会は、ここ数年シンポジウム形式となっており、その多くは、小・中・高・大からパネリストが出るものとなっている。今回のテーマは、「世界の一体化が進む中、なぜ歴史を学び、どのように歴史を学ぶのか～小・中・高一貫の歴史教育で身につけること、大学と連携すること～」。他校種の現状に触れる機会の少ない筆者にとっては、それぞれの現場で子どもの発達段階に応じてどのような実践がなされているのかということを知る良い機会となった。ただ、シンポジウムという割には、全体討議の時間が十分に確保されていなかった点に若干の不満が残るものであった。

午後の記念講演は、学習院大学の高埜利彦教授による「歴史学研究と歴史教育をつなぐ—江戸時代を中心に—」。高埜教授は『詳説日本史』の執筆者の一人であり、新しい研究成果がどのように教科書叙述に反映されていくのかということをご自身の業績を基に講演された。「朝鮮通信使」、「生類憐みの令と服忌令」など世界史の教員にも馴染みのある例を交えた興味深い内容であった。

3 日目は、例年どおり史跡見学。筆者は校務の関係で参加できなかったため、今回は、設定された 2 つのコースを紹介するにとどめておく。A コース:「徳川将軍家を巡る」、B コース:「近代政治史の舞台を巡る」。今回は、2 日間の参加で終わったが、年に一度全国の先生方と色々な情報交換ができる本大会に読者の皆さんも是非参加してはいかがだろうか。

関歴研第 27 回大会(埼玉大会)

関東歴史教育研究協議会は、1986年に設立され、1989年より毎年、関東各都県の(主として高校の)歴史教育研究団体が持ち回りで大会を開催している。大会といっても、全歴研のような特別な大会を設定するのではなく、各都県の研究大会を関歴研の大会と兼ねて開催している。原則として関東各都県の時計回りでの開催順となっており、神奈川では、2014年3月(年度としては2013年度)の開催が直近である。それから2年後の大会となるので埼玉県が開催県となった。全歴研と異なり1日の日程で、研究発表、記念講演、史跡見学をこなさなくてはならないので、運営側にとっても参加者にとっても気の抜けないイベントといえよう。今大会は、12月5日(土)に埼玉県立熊谷西高等学校を会場に開催された。

午前の研究発表では、アクティブラーニング型の実践報告が2本行われた。1本目は、埼玉県立浦和東高等学校の金間聖幸先生による「なぜ、1972年アメリカ大統領ニクソンは電撃的に中国訪問し和解が成立したのか～協調学習を用いた授業づくり～」と題する発表で、ジグソー法の効果的な実践例を知ることができた。2本目は、開催校である熊谷西高校の多田万里子先生による「解釈型歴史学習の実践―熊谷直実を題材に」と題する発表で、地元では駅前の銅像や「ニャオざね」というゆるキャラにもなって愛されている(!?)熊谷直実をとりあげた実践であった。具体的には、直実出家の理由を『吾妻鏡』と『平家物語』の記述から推理し、両者の相違について話し合うという、相当にレベルの高い内容であった。なお、(相変わらずの不勉強をさらすので心苦しいが)熊谷の隣の深谷は二俣川の戦いで滅ぼされた畠山重忠の根拠地(所領)であったことを今回初めて知り、不思議な縁を感じた。

午後の記念講演は、群馬県立博物館の梁瀬大輔先生の「関東平野の戦国時代―東関東と西関東―」と題する講演。梁瀬先生は、「戦国時代は関東で始まり関東で終わった」を持論とし、1455年に始まる享徳の乱をその開始時期としている。ちなみに、受験生必携の山川用語集では戦国時代を「応仁の乱(1467)後の約1世紀」となっている。その後の関東における勢力地図の変遷をわかりやすくまとめた講演であったが、筆者が最も興味を覚えたのは、梁瀬先生の唱える「ふたつの関東」という概念であった。関東を二分する際、現在のわれわれは、「南関東」と「北関東」という分け方をするのが一般的であろう。しかし、戦国期では(東遷移前の)利根川を境界とする「東関東」と「西関東」という分け方が重要で、これが古河公方と関東管領の対立(享徳の乱)の背景の一つであることや「河東」「越河」という利根川に因む熟語が戦国期の史料に頻出しているということを、梁瀬先生は指摘した。そこから、仮説の段階ではあるが、関東の南北区分の成立を利根川の東遷移や江戸の発展と地回り経済圏の成立との関係で説明できそうであるということも示唆した。

史跡見学は、寄居町にある鉢形城を訪れる。この城は、後北条氏の関東支配にとって北の要ともいえる平山城で、荒川に面した断崖を巧みに利用したつくりとなっている。時間の関係で1時間程度の駆け足で遺構と資料館の見学を済ませ帰路についた。

埼玉県は今年の特設大会の開催県でもあり、その準備だけでも大変な時期に内容の濃い大会を企画運営したことに敬意を表し、7月27日からの全歴研大会の盛會を祈念することで、本報告を結びたい。



御殿曲輪



花袋詩碑